

## おわりに

帰国してすでに一年が経った。スラウエシでの臨場感にあふれた緊張した日々は、すでに過去形で語る世界になってしまった。専門家という開発実務家として過ごした五年間は、地域研究を志す者として、自分が何のためにインドネシアを学び続けているのかを問い直す貴重な機会となった。さまざまな経験のなかで、自分の見てきたインドネシアがいかに狭く浅いものであるかを思い知ったし、研究者と実務家との違いについても思いをめぐらせたし、何よりも、研究や論文の世界と現実の世界との間に信じ難いような距離があることを実感した。いつたい、今私が研究所でやっていることは、インドネシアで関わってきた人々や彼らをとりに巻く社会にとつて、どれほどの意味をもつのだろうか。インドネシアの現場で毎日否応なく対峙させられたリアリティが、どんどん遠くなっていくのを感じる。

長年にわたるスハルト体制が崩壊したインドネシアは、これまでとは違う新しいインドネシア像を探る試行錯誤の道をたどり始めている。外見上は危なっかしくて心配でしかた

がないし、一見するとスカルノやスハルトの時代に戻ろうとしているかのようにみえるが、現場で定点観測していると、さまざまなレベルで変わり始めた何かが見える。住民を無視した自己中心的な学生デモを痛烈に批判するベチャ（輪タク）曳き、かつては何でも力ネだったのに今では地域に必要な技術支援を求める村長、村々を巡回してジャワで学んできた有機肥料作りの技術を教える農民グループ、ジャカルタからの指示待ちをやめて自ら考へ始めた県知事・市長、中央集権ではない新しいインドネシア・モデルを地方から提案しようとする真剣に議論し始めた大学教授。少しずつではあるが、「インドネシア人は……」と一括りに単純化されて言われてきたものとは違う何かが、外部からは見えにくいところで動き始めている。

二〇〇一年末から、宗教や種族などを理由に、互いに争ってきた人々がようやく和解への動きを始めたことも特筆される。二〇〇一年十二月には対立してきた中スラウエシ州ポソのイスラーム教徒とキリスト教徒の代表が和解して肩を抱き合い、また二〇〇二年二月にはマルク州アンボンのイスラーム教徒とキリスト教徒の代表が過去の過ちを謝罪しあつてアンボン市内を一緒に平和行進した。和解交渉では、南スラウエシ商工会議所会頭だったときに私と懇意にしていたユスフ・カラ社会福祉調整大臣や、私の業務を全面支援して

くれたパラグナ南スラウエシ州知事らが仲裁役として動いた。彼らをはじめ、かつてポソやアンボンで出会った人々の笑顔、紛争前の平和だった頃のポソやアンボンののかな風景、ブトン島で会ったアンボンからの避難民の姿などが次々と脳裏に浮かんできて、感無量の気持ちになった。避難民の帰還などを含めた住民和解の具体的なプロセスはこれからであり、人々の受けた心の傷がこれから数世代にわたって残るであろうことを考えれば、大変な作業となるが、過去の経験から十分に学習し、時間はかかっても着実に住民和解へのプロセスを進めていって欲しいと願わずにはいられない。

私も、インドネシアを学び続ける一人として、新生インドネシアへ向かうさまざまな試行錯誤のプロセスを微力ながらしっかり見守っていきたい。そして、外部者としては僭越かもしれないが、これからのインドネシアについて自分なりに考え続け、インドネシアの知人たちに何かを発信していこうと思っている。本書はそうした思いの最初の一步でもある。

スラウエシに滞在した間、私たち家族は数えきれない多くの人々に支えられ、助けられてきた。わが家でも、使用人ティニの作るミーゴレン（焼きそば）やカプルン（サゴやし澱粉をすいとんのようにした料理）は絶品だったし、一歳半で連れてきた娘と毎日遊んでく

れ、暴動のときに泊まつてわが家を守ってくれた運転手アデイには、全幅の信頼を置いていた。滞在期間中に、私たち家族は耐えがたい試練も経験したが、スラウエシとその人々は、悲嘆にくれる私たちを優しく暖かく支えてくれた。

本書の最後に、思い出がいっぱい詰まったスラウエシへの感謝の気持ちを表したい。

二〇〇二年三月

松井和久